

18 世紀におけるオランダ東インド会社と アジア経済

綿と貴金属の貿易を通して

福島邦久

1 はじめに

オランダ連合東インド会社（以下、VOC と略記する）は、1602 年にオランダ国内に複数存在していたアジア貿易を目的とする会社を統合することで成立した。国家からアジア貿易の独占権を与えられていた VOC は、その後 200 年にわたって活動を続け、本国の経済に大きく貢献していた⁽¹⁾。また、アジア経済史の文脈では、VOC は競争相手を武力で排除して香辛料などの貿易を独占し、圧倒的な権力を行使した「支配者」として捉えられてきた⁽²⁾。このような捉え方は、17 世紀末から 18 世紀にかけてのアジアの経済やアジア域内での貿易を「停滞」の時代と捉える解釈に基づいている。この解釈によると、15 世紀以降に「交易の時代」を迎えて拡大傾向にあったアジア域内での海上貿易は、17 世紀末から 18 世紀前半にかけて銀価格の下落、日本や中国による貿易統制の強化、インドのムガル帝国やペルシアのサファヴィー朝の衰退などが要因となり、停滞の時代を迎えていた。そしてその時代のアジアの貿易を武力で独占しようとしたのがオランダやイギリスなどのヨーロッパ勢力であり、VOC やイギリス東インド会社（以下、EIC と略記する）などが香辛料や綿織物などの主要商品における独占体制を確立したことでアジア人による貿易活動は衰退し、それ以前に成立していた多極的な交易網は破壊された。さらに、この時期にアジアに対するヨーロッパの影響力が強まったことで、19 世紀以降の本格的な植民地化や「自由貿易」体制の強制へとつながっていったと考えられてきた。

しかし、このような伝統的な解釈に対して、最近の研究では、18 世紀のアジア経済が「停滞」ではなくむしろ「展開」の時代を迎えていたということが主張されるようになってきている。確かに国家の視点で考えると 18 世紀のアジア経済・アジア間貿易は停滞していたと解釈

(1) ヤン・ド・フリース、アド・ファン・デア・ワウデ（大西吉之・杉浦未樹訳）『最初の近代経済——オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815——』名古屋大学出版会、2009 年、433-440 頁。

(2) VOC をこのような視点から捉えた文献として、永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社、1971 年；鈴木恒之『オランダ東インド会社の覇権』石井米雄編『岩波講座東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』岩波書店、2001 年などが挙げられる。

することができるが、よりミクロな民間商人の活動に注目すると、異なる解釈が可能となる。例えば、中国の清王朝は海外貿易の国家による統制を強めようとしていたが、一方で民間の華人商人たちは東南アジア各地に移住して強力な貿易ネットワークを形成していた。また、インドでも中央のムガル帝国は衰退していたが、地方では独立政権が勢力を伸ばしており、それと結びついた EIC に属さないイギリス人の私貿易商人が商業活動を活発化させていた。さらに、東南アジアにおいても、ブギス人などの民間商人が VOC の貿易システムをかいぐって盛んな貿易活動を展開していた。そして、これらの民間商人を担い手として、特に 18 世紀後半にアジア間貿易は大きく拡大していたということが明らかになってきている。⁽³⁾つまり、18 世紀のアジア海域世界は「停滞」の時代ではなく、ヨーロッパ人を含む多くの商人が活発に交流する「競合と協力」の時代であったのである。⁽⁴⁾

このような解釈に基づくと、アジアで他の勢力を排除して貿易を独占的に支配していたとする、従来の VOC に対する解釈は見直しを余儀なくされる。そこで本稿では、18 世紀の VOC にとって最も重要な商品であったインド産綿織物と、それを獲得するために必要不可欠であった貴金属の貿易を事例として VOC のアジアにおける貿易活動を考察し、新しいアジア経済史像に基づいて 18 世紀における VOC とアジア経済との関係の再解釈を行う。そしてこのような再解釈を行うことは、16 世紀以降に「中核」となったヨーロッパが、アジアを含む世界の他の地域に対して常に一方的に影響力を行使して、自らの「世界システム」に取り込んでいったとする、ウォーラーステイン以来の世界史像を根本的に見直すことにもつながる。⁽⁵⁾

2 18 世紀の VOC とインド産綿織物

(1) 綿織物の重要性

本章では、18 世紀における VOC の貿易活動を綿織物貿易に注目して概観し、VOC にとってのインド産綿織物の重要性を示した上で、関連する先行研究の紹介を行う。

従来の研究では、VOC による貿易活動の最盛期は 17 世紀であり、18 世紀には EIC 及びフランス東インド会社の台頭や、主力商品であった香辛料のヨーロッパにおける販売価格の下落に伴うアジア・ヨーロッパ間貿易の利益率の低下によって、アジア貿易における VOC の重要性は失われていたとする考え方が一般的であった。しかし最近の研究で、VOC は 18 世紀に

(3) このような解釈に関しては、弘末雅士『東南アジアの港市世界——地域社会の形成と世界秩序——』岩波書店、2004 年；太田淳「18 世紀の東南アジアと世界経済」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008 年などを参照。

(4) 島田竜登「近世アジアの交易世界——オランダ東インド会社文書からの接近——」『歴史と地理』634 号、2010 年、6-11 頁。

(5) ウォーラーステインの提示する世界史像に関しては、イマニュエル・ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立 I・II』岩波書店、1981 年；同『近代世界システム 1600-1750 ——重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』名古屋大学出版会、1993 年；同『近代世界システム 1730-1840s ——大西洋革命の時代』名古屋大学出版会、1993 年などを参照。

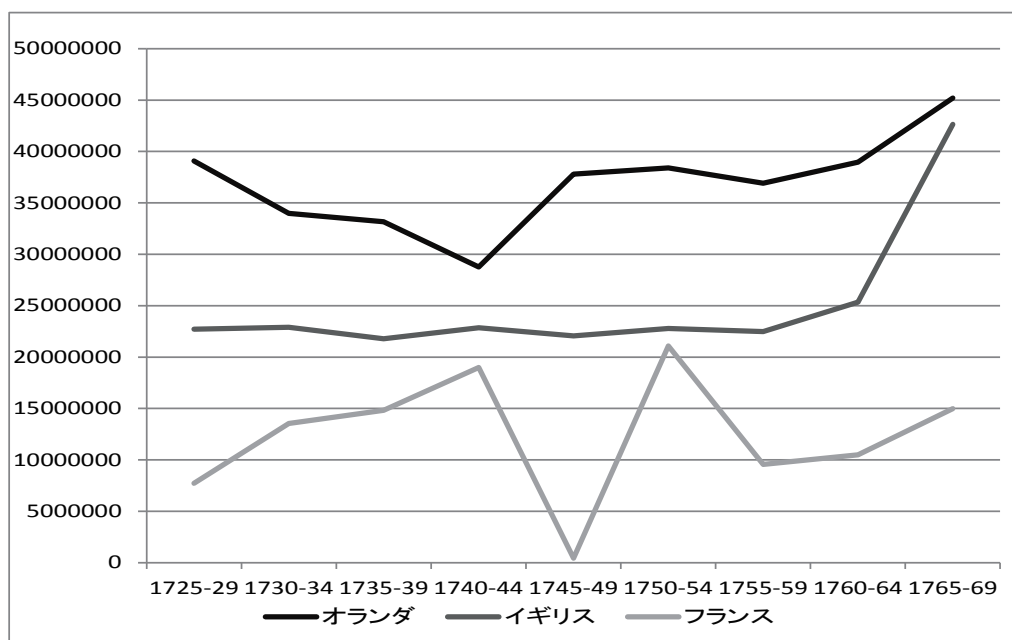


図1 3つの東インド会社のアジア商品のヨーロッパでの年平均販売額 1725-1769年（単位：リーブル）
 典拠：島田竜登「18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」『西南学院大学経済学論集』43巻1・2合併号、2008年、44頁、表4より作成。

入ってもアジアとヨーロッパを結ぶ貿易において重要な存在であり続けていた、ということが明らかになってきている。図1は、1725年から1769年におけるオランダ・イギリス・フランスの三つの東インド会社のヨーロッパでの商品販売金額の推移を示している。このグラフから、VOCは少なくとも1760年代前半まではイギリス・フランスの両東インド会社に大きな差をつけて最大の販売金額を誇っていたということが分かる。

さらに、近年研究が進んできたアジア間貿易の面から見ると、VOCが上げる利益は18世紀になってむしろ増大していた。VOCはアジア・ヨーロッパ間の貿易を第一の目的とする組織であったが、同時にアジア域内で行われるアジア間貿易の主体でもあり、アジア域内でも大規模な貿易活動を展開していた。そして後述するように、アジア間貿易はVOCにとってEICなどの他のヨーロッパ勢力にはない大きな利点となっていた。VOCのアジア間貿易に関する研究によると、18世紀においてもその利益率は拡大し続けており、アジア間貿易の利益率増大がアジア・ヨーロッパ間貿易の利益率低下を補う役割を果たしていた。このことから、18世

(6) VOCをアジア間貿易の主体として捉えた研究としては、Om Prakash, *European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India*, Cambridge, 1998（以下、*European Commercial Enterprise*と略記する）；Ryuto Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century*, Leiden, 2006；Els Jacobs, *Merchant in Asia: The Trade of The Dutch East India Company During the Eighteenth Century*, Leiden, 2006などが挙げられる。

(7) 例えば、島田竜登はVOCによる日本銅のアジア間貿易の利益率が1750年頃から1760年頃にかけて最高水準になったことを指摘している。島田竜登「18世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易——バタヴィア総督府文書の分析——」『日蘭学会会誌』28号、2003年、25-27頁（以下、「18世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易」と略記する）。

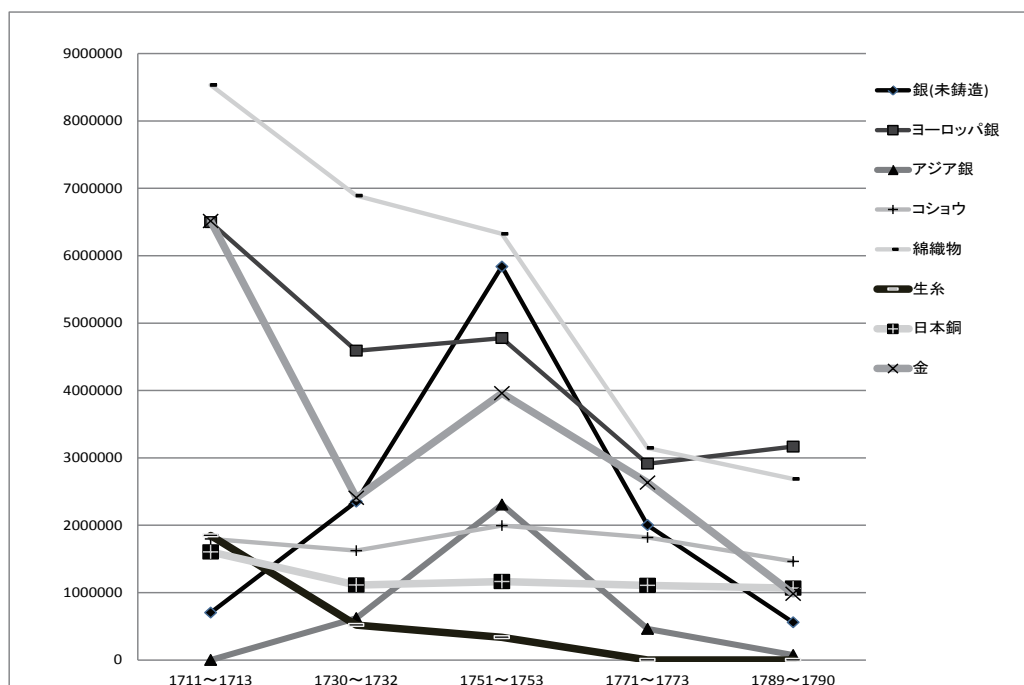


図2 18世紀のVOCのアジア間貿易における商品別取引金額の推移（単位：ギルダー）
 典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 373, Table 47 より作成。

紀のVOCは、少なくともアジア内では利益の上がる貿易を行い続けており、重要な役割を果たし続けていたと考えられるようになってきている。

そして、このような18世紀のVOCの活動を支えていたのが、インド産の綿織物であった。17世紀の時点では、VOCの対ヨーロッパ輸出の中心商品は香辛料であり、1650年代には輸出総額の50パーセント以上を占めていた。しかしその後、ヨーロッパで香辛料の価格が下落し、以前ほど利益の上がる商品ではなくなると、これに代わってヨーロッパでブームになったのがインド産綿織物であった。このようなヨーロッパ市場における変化に対応して、VOCの対ヨーロッパ輸出に占める香辛料の割合は低下し、1740年頃には14パーセントほどになった。これに対し、綿織物などのインド産品の占める割合は、1650年頃の約14パーセントから1740年頃の約41パーセントにまで上昇していた⁽⁸⁾。このことから、18世紀のVOCのアジア・ヨーロッパ間貿易における中心商品は、17世紀の香辛料から綿織物に移っていたということが分かる。

さらに、綿織物はVOCのアジア間貿易においても重要な役割を果たしていた。インド産綿織物はアジア全域に輸出されており、特に、島嶼部東南アジアでの需要は高かった⁽⁹⁾。アジア間貿易における綿織物の重要性を証明する資料が図2である。図2は、18世紀におけるVOC

(8) Prakash, *European Commercial Enterprise*, pp. 114-118.

(9) Anthony Reid, 'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth, 1600-1850', in Giorgio Riello and Tirthankar Roy (eds.), *How India Clothed the World: the World of South Asian Textiles, 1500-1850*, Leiden, 2009, pp. 31-34 (以下、'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth' と略記する)。

のアジア間貿易で取引された商品ごとの金額の推移を示している。図2によると、18世紀のほとんどの時期においてVOCのアジア間貿易で最も大きな割合を占めていた商品は綿織物であり、割合としては全体の15パーセントから25パーセントほどであった。このことは、綿織物がアジア間貿易においても最も重要な商品の一つであったということを示している。

このように、18世紀のVOCにとって、インド産綿織物はアジア・ヨーロッパ間貿易及びアジア間貿易という二つの貿易における最も重要な商品の一つであった。そのためVOCは、インドで多くの綿織物を確保していく必要があったが、少なくとも18世紀半ば頃まではイギリスやフランスなどの東インド会社との激しい競争にさらされながらも一定量の綿織物を確保することに成功していた。しかし、18世紀後半、特に1780年代以降には、VOCの綿織物獲得量は急速に減少している。そこで以下では、18世紀半ばまでVOCがなぜ効率的に綿織物を確保できていたのかという問題と、その貿易がなぜ衰退することになったのかという問題を、特に金や銀などの貴金属のアジア間貿易に注目して考察することで、18世紀におけるVOCとアジア経済との関係をより具体的に明らかにしていきたい。

(2) VOCの綿織物貿易概観

VOCがインドに拠点を築き、綿織物の購入を開始したのは17世紀初め頃のことであった。VOCは当初、インドで購入した綿織物の大部分を東南アジアに輸出し、当時のヨーロッパ向け主力商品だった香辛料購入のための対価としていた。つまり、綿織物はアジア間貿易の商品として求められたのである。その後ヨーロッパで綿織物の需要が高まるにつれて、VOCはヨーロッパ向けの綿織物輸出を増加させていき、1680年頃までは他のヨーロッパ諸国を押さえて最大のヨーロッパへの綿織物の供給者であった⁽¹⁰⁾。17世紀末からEICが綿織物のヨーロッパ向け輸出を急激に増加させた上、フランス東インド会社の参入で競争が激化したことで、18世紀に入るとVOCはその地位を失ったが、依然として多くの綿織物をヨーロッパに供給し続けており、アジア・ヨーロッパ間の貿易で大きな役割を果たし続けていた。

18世紀半ば頃から、EICはインドにおいて政治的、軍事的影響力を増大させていった。EICは1744年から、ヨーロッパでのオーストリア継承戦争に連動する形でフランス東インド会社との武力衝突を開始した。カーナティック戦争と呼ばれるこの戦争に際して、VOCは中立を保ち、参加することはなかった。一方で、EICはこの戦いを有利に進め、1757年のブラッシーの戦いで勝利し、1760年にはインドからフランス勢力を完全に排除することに成功した。その後EICは、1765年にベンガル地方の徴税権を獲得し、事実上の支配権を確立した。このようなEICの勢力拡大を脅威と感じたVOCは、1759年にバタヴィアからベンガルへ兵力を派遣しているが、EICによって撃退されている。そして1780年に第四次英蘭戦争が始まると、アジアでもVOCとEICとの間で武力衝突が起こった。この戦争は1784年まで続き、VOCは大きな打撃を受けることになった。

(10) Prakash, *European Commercial Enterprise*, pp. 111-127.

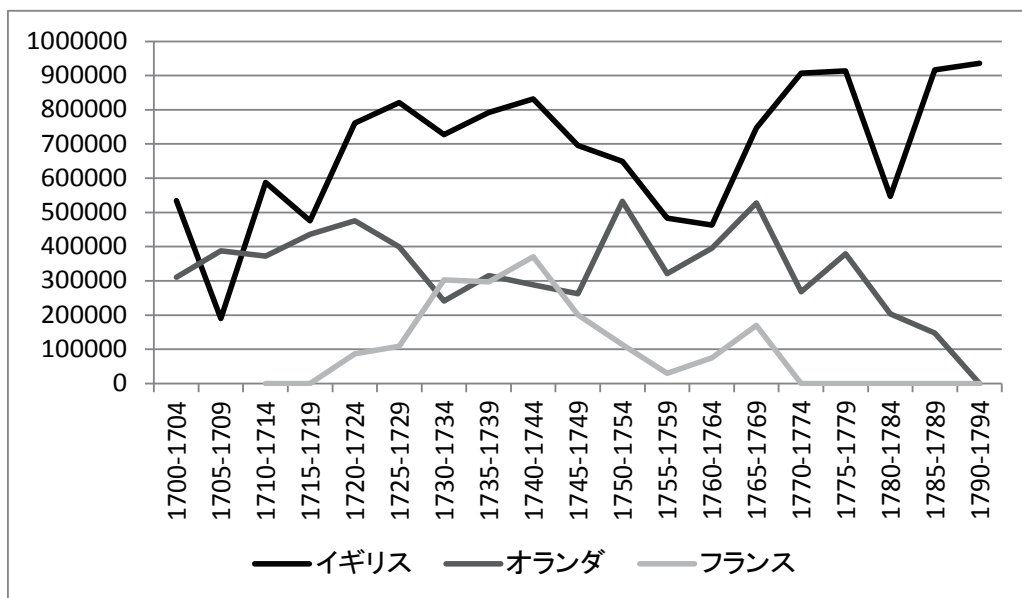


図3 3つの東インド会社による対ヨーロッパ綿織物輸出量の推移（単位：反）

典拠：Giorgio Riello, 'The Globalization of Cotton Textiles: Indian Cottons, Europe, and the Atlantic World, 1600-1850', in Giorgio Riello and Prasanna Parthasarathi (eds.), *The Spinning World: A Global History of Cotton Textiles, 1200-1850*, Oxford, 2009, p. 265, Table 13. 1. より作成。

この時期に VOC の綿織物貿易は衰退していった。図3は、18世紀にオランダ・イギリス・フランスの三つの東インド会社がアジアからヨーロッパへ輸出した綿織物の量の推移を示している。図3によると、18世紀のVOCの対ヨーロッパ綿織物輸出量は増減を繰り返しながらも約30万反から約50万反の間を推移しており、1750年代前半と1760年代後半には18世紀を通しての最高水準に達していた。対ヨーロッパ輸出量をフランス東インド会社と比べると、ほぼすべての年代で上回っていることが分かる。またEICと比べても、総量では劣っているが年代によってはEICに近い量の綿織物をヨーロッパに輸出している。さらにVOCはEICと異なり、アジア間貿易にも相当量の綿織物を回していたため、この量を加えれば差はかなり縮まると考えられる。⁽¹¹⁾しかし1780年代以降、VOCの対ヨーロッパ綿織物輸出量は急速に減少していき、1790年代には皆無になった。もちろんこの時期にヨーロッパで綿織物需要が減少していたというわけではなく、EICは変わらず大量の綿織物をヨーロッパへ輸出し続けている。また、図2から明らかな通り、18世紀末にはアジア間貿易での綿織物の取扱量も大きく減少していた。このような綿織物貿易の不振が続く中、VOCは経営不振に陥り、フランス革命の混乱の中で1799年には解散することになった。

(11) VOCがその貿易で取り扱った綿織物のうち、ヨーロッパへ輸出されたものの割合は、18世紀を通して、30パーセントを超えることはなく、残りはアジア市場に回されていた。Giorgio Riello, 'The Indian Apprenticeship: the Trade of Indian Textiles and the Making of European Cottons', in Riello and Roy (eds.), *op. cit.*, pp. 330-331.

(3) 綿織物貿易の不振を巡る諸解釈

VOC の綿織物貿易の不振は、EIC のインドでの政治的影響力拡大の文脈の中で理解されてきた。つまり、プラッシーの戦いを経てベンガル地方の支配者となっていた EIC が、競争相手であった VOC のインドにおける活動を制限し、VOC の綿織物貿易を妨害したことが VOC に深刻な打撃を与えたということである。例えば羽田正は、1759 年の EIC の VOC に対する軍事的勝利が VOC などの他のヨーロッパの東インド会社を抑えることにつながったとしている⁽¹²⁾。

確かに、プラッシーの戦い以降の EIC の勢力拡大が VOC の綿織物貿易に打撃を与えたことは間違いない。しかし、この打撃が VOC の解散に直接つながるほどのものであったかどうかについては疑問が残る。エルス・ヤコブスによると、EIC はプラッシーの戦いの後、確かにベンガルにおいては圧倒的な優位を確立したが、ベンガルに並ぶ有力な綿織物輸出地であったコロマンデル海岸を始めとするインドの他の地域では、イギリスによる支配がそれほど強力ではなく、VOC は従来の貿易体制を維持することができていた。さらにヤコブスは、VOC はベンガルにおいても EIC に属さないイギリス人私貿易商人と協力関係を築くことで、ある程度綿織物獲得量を回復させることに成功していたと述べている。ヤコブスのこのような分析は、オム・プラカッシュの数量的な分析とも一致している。プラカッシュによると、プラッシーの戦い以降も 1770 年代初め頃までは、コロマンデル海岸からの綿織物輸出量は減少しておらず⁽¹⁵⁾、ベンガルからの輸出量も 1780 年代初め頃までは一定量を維持していた。さらに、図 3 からも、VOC の対ヨーロッパ綿織物輸出量が大きく減少し始めるのは 1780 年代以降である、ということが分かる。つまり、VOC の綿織物貿易は一定の制限を受けることにはなったが、それによって貿易が極端に衰退したわけではなかったということである。そこでヤコブスやプラカッシュは、1780 年に始まった第四次英蘭戦争を重視しており、この戦争で EIC によって多くの VOC 商船が拿捕されたことが VOC に決定的な打撃を与えることになったと主張している。

このような、戦争などの政治的な要因が VOC の貿易活動を不振に追い込んだ決定的な要因の一つであったことは間違いない。これに対し、経済的な視点からより長い期間を視野に入れた研究として、島田竜登による VOC の日本銅のアジア間貿易に関する研究が挙げられる。島田によると、銅は 18 世紀において南アジア全域でさまざまな用途で使用される重要な商品であり、高価で取引されていた。島田は、当時ヨーロッパ勢力として唯一日本との貿易を許されていた VOC が、18 世紀を通じて一定量の銅を対日本貿易で確保することに成功し、その⁽¹⁷⁾

(12) 羽田正『興亡の世界史 15 東インド会社とアジアの海』講談社、2007 年、302-303 頁。

(13) Jacobs, *op. cit.*, pp. 136-137.

(14) *Ibid.*, pp. 139-141.

(15) Prakash, *European Commercial Enterprise*, p. 222.

(16) *Ibid.*, p. 196.

(17) 当時の日本はアジアの中でも有力な銅産出国であった。

銅を綿織物の産地であるインドに供給することができていたという点が、他の東インド会社にはない大きな利点になっていたと述べている⁽¹⁸⁾。しかし、1720年代から18世紀後半にかけて、EICがイギリス本国における製銅業の発展を背景に、安価なイギリス銅を大量にインドに対して供給するようになり、その量がVOCによる日本銅輸出を凌駕するようになったことで、VOCのインドへの銅供給者としての役割が薄れ、VOCのインドにおける貿易が不振に陥ったと島田は主張している⁽¹⁹⁾。

3 VOCのアジア間貿易と貴金属

(1) 貴金属の重要性

島田の研究は、当時アジア間貿易で高い利益率を誇り、南アジアで大きな販路を持っていた銅を通してVOCのアジア間貿易を分析し、それまでの研究にはなかった経済的・長期的な視野でVOCの衰退の要因を探っているという点で大きな意義がある。しかし、分析対象を銅に絞っているという問題点がある。18世紀にVOCが綿織物の対価としてインドに輸出していた銅に並ぶ重要商品として、銀や金などの貴金属が挙げられる。図4は、1711年から1713年と、1751年から1753年という二つの年代における、VOCによるインドのベンガル地方に対する輸出総額に占める各商品の割合を示している。図4によると、1711年から1713年の期間におけるVOCのベンガル地方に対する輸出品のうち、約83パーセントを占めていたのは銀であった。銀が圧倒的な割合を占めるという傾向は18世紀半ば頃にも変わることはなく、1751年から1753年の期間においても約85パーセントを銀が占めている。このことから、ベンガル地方に対する輸出品としては、銀が非常に重要であったということが分かる。

一方、図5は、図4と同じ時期のコロマンデル海岸に対する輸出品の構成を示している。図5によると、1711年から1713年の期間におけるVOCのコロマンデル海岸に対する輸出のうち最も大きな割合を占めていたのは金であり、その割合は約85パーセントであった。1751年から1753年の期間には銀の割合が高く、約30パーセントを占めるようになっているが、金の割合も約47パーセントであり、金と銀で80パーセント近くを占めている。つまり、コロマンデル海岸に対する輸出品としては貴金属、特に金が重要であったということである。

銀か金かという違いはあったが⁽²⁰⁾、どちらの地方への輸出においても貴金属が圧倒的な割合を占めていたという点では共通している。インドの中でも特に綿織物の有力な生産地であったベンガル・コロマンデル両地方への輸出の多くを貴金属が占めていたという事実は、VOCがインド産綿織物を効率的に購入するためには大量の貴金属を確保することが必要不可欠であっ

(18) 島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易——アジアをつないだその活動——」『歴史評論』644号、2003年、13頁（以下、「オランダ東インド会社のアジア間貿易」と略記する）。

(19) 島田「オランダ東インド会社のアジア間貿易」、14頁。

(20) この違いの主な原因は、当時のベンガルが銀を主要な通貨とする銀経済圏であったのに対し、コロマンデルは金経済圏であったからであると考えられている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 157-158.

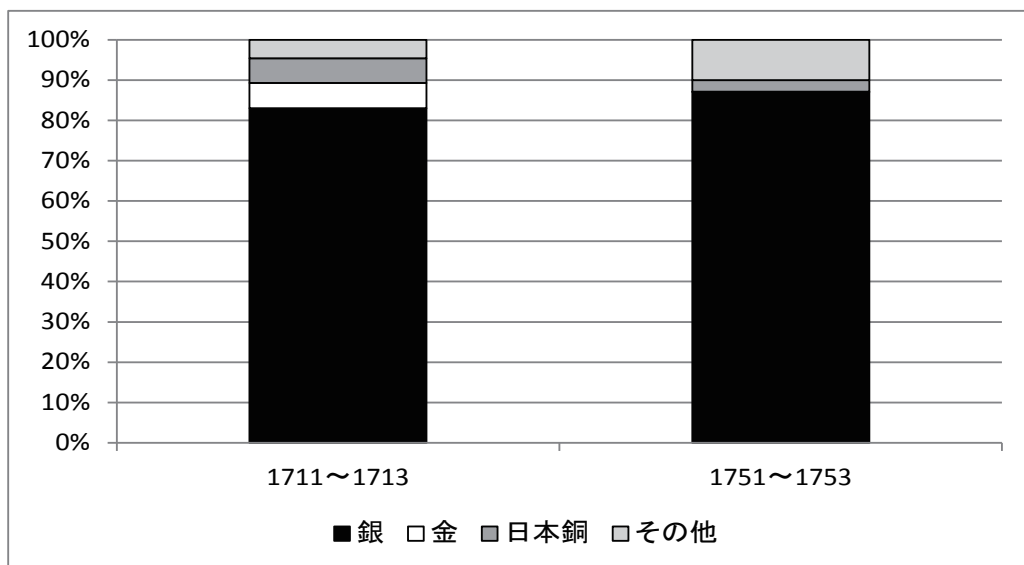


図4 VOCの対ベンガル輸出品構成
 典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 327, Table 15. b. より作成。

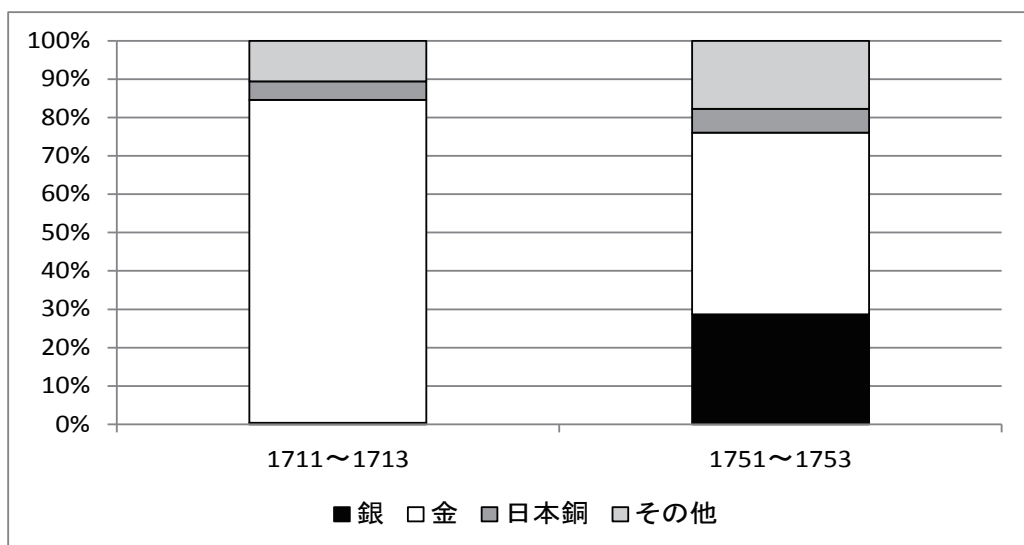


図5 VOCの対コロマンデル輸出品構成
 典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 323, Table 13. b. より作成。

た、ということを示している。そこで、本章では VOC がどのように貴金属を確保していたのかという問題を、アジア間貿易に注目して考察していく。

(2) アジア間貿易と貴金属

アジア貿易を行う際、オランダは他のヨーロッパ諸国と同様にアジア商品の対価となりうる商品を持っていなかった。そこで VOC は、スペイン領のアメリカ大陸からヨーロッパにもた

らされていた貴金属、特に銀を喜望峰経由でアジアに輸出し、現地で貨幣として鑄造してアジア産品購入の資本とした。銀はアジアにおいて非常に高い価格で取引されており、当時のヨーロッパにおける金と銀の交換比率が1対12であったのに対し、ペルシアでは1対10、インドでは1対8、中国では1対6であった⁽²¹⁾。つまり、アジアにおける銀の価値はヨーロッパに比べて高かったということであり、ヨーロッパ人にとって銀はアジアに持っていきただけで価値が上がる非常に重要な商品であった。そのため大量の銀がヨーロッパからアジアへ流出していくことになった。

このような状況下でヨーロッパ人がアジア貿易における利益を大きくするためには、アジア内で一定量の貴金属を確保し、ヨーロッパからの銀輸出を抑えることが必要であった。17世紀のVOCは、当時アジア最大の銀産出国であった日本との貿易を通じて大量の貴金属を獲得することに成功していた。当時の日本はVOC以外のヨーロッパ勢力との貿易を行っていなかったため、VOCにとって日本との貿易は他のヨーロッパ勢力に対する大きな利点となっていた。しかし、この貴金属輸出は17世紀末に江戸幕府によって禁止され、VOCが日本から貴金属を獲得することはできなくなった。多くの研究者は、これによってVOCがアジアに送らなければならない貴金属の量が急増したということを指摘し、アジア内で貴金属を得ることが困難になったことで、VOCの他のヨーロッパ勢力に対する優位は失われたとしている⁽²²⁾。

確かにこの時期にオランダからアジアに送られた貴金属の量は増加しており、日本との貿易で貴金属を確保できていた時期の圧倒的に有利な立場は失っていた。しかし実際には、18世紀にもVOCはアジア間貿易を通じて一定量の貴金属を確保することに成功していた。そのため、18世紀を通じて、VOCはアジアへの貴金属輸出をEICに比べて低く抑えながらEIC以上の規模の貿易を行うことに成功していた⁽²³⁾。つまり、VOCは18世紀においても、他のヨーロッパ勢力に対する優位をある程度維持することに成功していたといえる。

18世紀のVOCは、アジア間貿易全体を通じて貴金属の量を増加させることで大量の貴金属を確保していた。オランダから喜望峰を経由してアジアへ輸出されたアメリカ大陸産の銀の大部分は、アジアにおけるVOCの拠点であったバタヴィアに集められた⁽²⁴⁾。この銀はすぐにヨーロッパ向け商品購入に充てられたわけではなく、いったんアジア間貿易に投資された。VOCが銀を投資したアジア間貿易のルートは無数に存在していたが、その中でも最大のものはインド・東南アジア・日本を結ぶ「三角貿易」であった⁽²⁵⁾。

銀はまず、銀経済圏であったインドのベンガル地方へ輸出された。そしてVOCは銀と引き換えにインド産綿織物を購入し、銀はインド内部で流通することになった。ここでVOCが獲

(21) デニス・フリン（秋田茂・西村雄志訳）『グローバル化と銀』山川出版社、2010年、52頁。

(22) 羽田、前掲書、307-308頁。

(23) Om Prakash, 'Precious-Metal Inflow into India in the Early Modern Period', in Dennis Flynn, Arturo Giraldez and Richard von Glahn (eds.), *Global Connections and Monetary History, 1470-1800*, Aldershot, 2003, p. 152.

(24) この時期には、大部分がメキシコ産であった。フリン、前掲書、53-54頁。

(25) 島田「オランダ東インド会社のアジア間貿易」、5頁。

得したインド産綿織物は、すぐにヨーロッパへ輸出されたわけではなく、アジア各地へ輸出されていた。特に東南アジアの香辛料産地ではインド産綿織物に対する需要が高く、その利益率は非常に高かったため、VOC は東南アジアで綿織物を販売することで大きな利益を上げていた。綿織物の販売で利益を得た VOC は、東南アジアで砂糖・香木・染料などの商品を購入し、それらを日本に向けて輸出した。日本ではそれらの商品と引き換えに銅を獲得し、その日本銅がインドに向けて輸出されていた。日本銅はインドにおいて需要が高く利益率が高い商品であったため、VOC はインドで日本銅を販売することで大きな利益を上げた。インドで日本銅を販売した際の利益はインド内部で流通していた銀の形で得られたため、VOC は結果的にアジア商品を媒介にしたアジア内の貿易ネットワークを通じて、最初に投資した以上の銀を手に入れることに成功していた。

この「三角貿易」以外にも、VOC が貴金属の形で利益を得ていた貿易は数多く存在した。⁽²⁶⁾ その中でも、18 世紀前半にアジア内で金を獲得するために重要であったのが、ペルシアとの貿易である。VOC は 17 世紀前半からバンダレ・アッパースに商館を置いてペルシアとの貿易を行っていた。そして、当時のペルシアには、陸上交易ルートを通じてヨーロッパから大量の貴金属が流入していたため、VOC はペルシアに対する輸出の対価を金で得ることができた。⁽²⁷⁾ 17 世紀末に日本が貴金属輸出を制限するようになると、VOC にとってのペルシアとの貿易の重要性は高まっていき、18 世紀初め頃にはペルシアがアジア内で最も多くの金を獲得できる地域となっていた。VOC は、ペルシアに東南アジアで綿織物と引き換えに購入した砂糖や香辛料を輸出して、それらを販売してペルシアから金を獲得し、その金を綿織物購入のためにコロマンデル海岸に輸出していた。1711 年から 1713 年の間に、VOC がペルシアに対してアジア内の他の地域から輸出した砂糖などの商品の総額は約 28 万 7400 ギルダーであったのに対し、それと引き換えにペルシアで VOC が獲得した金の総額は 86 万ギルダーほどであった。このことは、ペルシアとの貿易が非常に大きな利益を生むものであったということを示している。同じ期間にコロマンデル海岸に向けてアジア内の他の地域から輸出された金の総額は約 103 万ギルダーであったことから、VOC がコロマンデル海岸で綿織物を購入する際にペルシア産の金が大きな役割を果たしていたということが分かる。

しかし、1730 年代には VOC のペルシアとの貿易は急速に衰えていくことになる。その最大の原因はペルシアの政治的な混乱である。当時のペルシアの王朝であったサファヴィー朝がアフガン人の侵入を受けて混乱し、1736 年に滅亡すると、ペルシアとの貿易は困難になっていった。1730 年から 1732 年の間に VOC がアジア内からペルシアに輸出した商品の総額は 14 万 8000 ギルダーほどであったが、獲得した金の総額は 5 万 6000 ギルダーほどにまで減少してお

(26) 以下で行う分析では、エルス・ヤコブスの提供する VOC のアジア間貿易に関する数量的なデータを用いている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 305-373 (なお、ペルシアに関しては Table 18、コロマンデルに関しては Table 13、広東に関しては Table 21、パダンに関しては Table 19、スーラトに関しては Table 14、ベンガルに関しては Table 15 をそれぞれ参照した)。

(27) *Ibid.*, pp. 159-160.

り、十分な金を確保することができなくなっていた。そのため VOC は、コロマンデル海岸向けの金を確保するための新たなアジア間貿易ルートを開拓する必要に迫られた。そして、ペルシアに代わって金の輸出元となったのが中国とスマトラ島であった。

VOC が広東で中国と初めて国交を開き、貿易を開始したのは 1729 年だった。金は広東での対中国貿易において、茶に並ぶ最重要商品であった。VOC は中国に銀を輸出して金と交換するという貿易を行っていたが、⁽²⁸⁾ 前述の通り中国はアジアの中でも特に銀の価値が高い地域だったため、VOC は有利なレートで銀と金を交換することができ、大きな利益を得ることになった。その結果、VOC は 1751 年から 1753 年の期間に中国で約 42 万ギルダーの金を獲得することに成功している。また、当時 VOC が勢力を拡大していたスマトラ島にも金山が存在した。そこで VOC はスマトラ島のパダンに商館を置いてインド産綿織物などを販売し、それと引き替えにスマトラ島産の金を獲得していた。この貿易もまた VOC に利益をもたらしており、VOC は 1751 年から 1753 年の期間に約 28 万ギルダーの金をスマトラ島で獲得した。そして中国とスマトラ島で獲得した金もペルシアで獲得されていた金と同様に、綿織物購入のためコロマンデル海岸へ輸出されていた。

さらに、VOC は 1750 年代になると、インド西部のグジャラート地方で銀を獲得するようになった。当時、グジャラート地方では、南アジアの他の地域と同様に、銀貨が広く流通していた一方で、砂糖や香辛料などの東南アジア産品や、日本銅などに対する需要があった。⁽²⁹⁾ そこで VOC は、スーラトに置いた商館を拠点にグジャラート地方へこれらの商品を輸出し、対価として銀を得た。1751 年から 1753 年の間に VOC はグジャラートで約 47 万ギルダーの銀を獲得している。その銀はやはりベンガル地方に輸出され、綿織物購入に充てられた。同じ時期にベンガル地方に輸出された銀の総額は約 300 万ギルダーで、グジャラートで獲得した銀の割合が極端に高かったというわけではないが、本国からの銀輸出を抑えるという意味では、このグジャラートからの銀も大きな役割を果たしていたと考えられる。

(3) 大規模なアジア間貿易を実現できた要因

ここまで考察してきたように、VOC はペルシアから日本までのアジア全域に広がった交易ネットワークを活用してアジア各地で貴金属取引を行っていた。このような、アジアに銀を持ち込み、購入したアジア商品を媒介として銀をアジア内で流通させ、再び銀や金の形でその利益を得るというサイクルを繰り返すことで、VOC は最初に投資した以上の貴金属を得ることに成功していた。そして、このシステムを通して得られた貴金属が綿織物を始めとするヨーロッパ向け商品の購入に用いられていたのである。つまり、このシステムこそが、VOC の綿織物貿易を支えていた重要な要素であったといえる。そして、このネットワークを形成し、維持するために必要であったのが、VOC の強大な資金力とアジアにおける海軍力、そして現地の商

(28) Paul A. Van Dyke, *The Canton Trade: Life and Enterprise on the China Coast, 1700-1845*, Hong Kong, 2005, p. 120.

(29) Jacobs, *op. cit.*, p. 104.

人との協力関係であった。

当時のアジアで利益の上がる大規模なアジア間貿易を行うためには、アジア間貿易に自由に投資することのできる資本が大量に必要だった。1602年にVOCが設立された際、集められた資本は約642万ギルダーであった⁽³⁰⁾。これに対しその2年前に設立されたEICが集めた資本は約53万ギルダーであり、VOCはEICの12倍以上という莫大な資本を持って設立されたということになる⁽³¹⁾。しかもEICの資本が1回の航海のたびに清算されて出資者に返還されていたのに対し、VOCの資本は1回の航海で清算されることなく10年間据え置かれ、その期間中は会社が自由に資本を使うことができた。このように、大量の資本を自由に使うことができたからこそ、VOCはアジア間貿易に大量の資本を投下することができたのである。

また、VOCはアジアにおける軍勢力でも他のヨーロッパ勢力を上回っていた。東インド会社の船は商船でありながら大砲を積んだ軍艦でもあり、船の数の差がそのまま軍勢力の差につながっていたが、VOCが17世紀から18世紀にかけてアジアに送った船の数は他のヨーロッパ諸国をはるかに上回っていた⁽³²⁾。さらに1隻あたりのトン数もイギリスやフランスなどの船に比べて大きかったため、同じ量の商品をヨーロッパに輸送するために用いる船の数をより少なく済ませることができた。そのため本国に帰還させることなくアジア内で運用することができた船の数が多く、アジアにおける海軍力で他勢力を上回ることが可能になり、より大規模なアジア間貿易を行うことができたのである。軍勢力で他のヨーロッパ勢力を上回ることができたVOCは、17世紀の時点でポルトガル勢力からマラッカなどの拠点を奪った上、東南アジアにおける貿易活動からEICをほぼ排除することに成功した。さらに、VOCは、当時のアジア間貿易において重要な役割を果たしていた日本との貿易をヨーロッパ勢力として唯一許されていた。これらの要素が重なったことで、VOCはEICなどの他のヨーロッパ勢力には実現できなかった大規模なアジア間貿易ネットワークを築き、18世紀まで維持することができたのである。

これを支えていたのが、オランダ本国の造船能力であった。17世紀以降、オランダの造船業は急速に発展し、ヨーロッパ内では圧倒的な造船能力を持つほどになっていた。VOCも自らオランダ国内に造船所を所有し、年平均で大小合わせて10隻前後の船を建造しており、その建造数は1750年頃までは減少することなく17世紀以来の高い水準を維持していた⁽³³⁾。また性能面でもオランダの船は他のヨーロッパ諸国の船に比べて優れていた。性能の高い船を自らの手で建造できたという点はVOCにとって大きな利点となっており、他のヨーロッパ勢力を排除しながらアジア間貿易のネットワークを築くためには必要不可欠であった。

(30) Femme Gastra, *The Dutch East India Company: Expansion and Decline*, Zutphen, 2003, p. 26.

(31) 永積、前掲書、67頁。

(32) 島田竜登「18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」『西南学院大学経済学論集』43巻1・2合併号、2008年、39-40頁。

(33) J. R. Bruijn, Femme Gastra and Ivo Schöffer (eds.), *Dutch-Asiatic Shipping in the 17th and 18th Centuries*, The Hague, 1987, p. 52.

これらの本国側の要因と同等、もしくはそれ以上に重要であったのが、アジアにおける現地商人との協力関係であった。VOCは大規模なアジア間貿易ネットワークを築いていたとはいえ、広大なアジアの貿易のすべてを支配下におさめることは不可能であった。海軍力でVOCが排除できたのはあくまでも他のヨーロッパ人のみであり、現地に深く根ざしていたアジア人商人まで排除することは困難だった。そのため当時のアジアでは、華僑やブギス人などのアジア人の民間商人も活躍しており、そのような商人たちは、VOCにとってアジア間貿易における重要な取引相手となっていた。アジアではヨーロッパ人よりもアジア人の方がはるかに多かったということもあり、VOCも取引相手としてのアジア人商人たちとの関係を軽視するわけにはいかなかったのである。VOCが現地商人と協力関係を築いていた例として、ジャワにおける砂糖生産をめぐる華僑商人との関係が挙げられる。砂糖はペルシアや日本、グジャラートなどに対する有力な輸出品であり、アジア内で貴金属を獲得するために必要不可欠な商品であった。そのためVOCは、砂糖を安く入手するために、勢力下に置いていたジャワで砂糖の生産を行うようになり、この砂糖生産を高い製糖技術を持っていた福建系の華僑に請け負わせていた。⁽³⁴⁾ 生産を請け負った華僑は、現地領主から土地を借り受け、ジャワの住民や流入してきた華僑を労働力として砂糖キビ栽培と加工工場を経営し、生産した砂糖を一定の値段でVOCに供給していた。この形態での砂糖生産は1680年代に始まっていたが、1720年代までには生産量も大幅に増大し、ここで生産された砂糖がVOCのアジア間貿易で大きな役割を果たすようになっていた。⁽³⁵⁾ つまり、VOCは砂糖を安価で入手するために福建系華僑の協力を必要としていたということであり、この例に見られるように、VOCがアジア間貿易で貴金属の対価となる商品を効率よく獲得していくためには、華僑など現地のアジア人との協力関係を築くことが必要不可欠であった。⁽³⁶⁾

4 VOCのアジア間貿易の衰退

(1) アジア間貴金属貿易の衰退

図6は、18世紀の五つの時期においてオランダからアジアへ輸出された貴金属の総量と、VOCのアジア間貿易でアジア内を流通した貴金属の総量をそれぞれ示している。図6によると、1711年から1713年の間にオランダからアジアに送られた貴金属の総額は300万ギルダー

(34) 1710年の時点で、バタヴィア周辺には130カ所の砂糖生産工場があり、84人の経営者たちがそれらの工場を経営していたが、そのうちの79人は華僑であった。Leonard Blussé, *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*, Dordrecht, 1986, p. 90.

(35) 籠谷直人「東アジアにおける自由貿易」籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク——長期の19世紀——』世界思想社、2009年、145頁。

(36) ジャワにおける商品作物生産をめぐるオランダ人とアジア人との関係に関する研究としては、これ以外にも、Atsushi Ota, *Changes of Regime and Social Dynamics in West Java: Society, State and the Outer World of Banten 1750-1830*, Leiden, 2006; 大橋厚子『世界システムと地域社会——西ジャワが得たもの失ったもの 1700-1830——』京都大学学術出版会、2010年などが挙げられる。

ほどだったが、アジア内で取引された貴金属の総額は約 1370 万ギルダーにのぼる。これは、この時期にアジア内で活発な貴金属取引が行われていたことを示しており、その利益も非常に大きかったと考えられる。その後 1730 年代初めに貴金属のアジア内流通量は一時減少するが、1750 年代には再び上昇し、1700 万ギルダーに近い量の貴金属がアジア内を流通している。しかし、その後貴金属のアジア間貿易は急速に衰退していき、1789 年から 1791 年の期間になるとアジア間貿易で流通した貴金属の量は 477 万ギルダーほどに減少している。

一方で、オランダからアジアへの貴金属輸出量は、少しずつではあるが 18 世紀を通じて上昇し続けている。つまり、18 世紀後半の VOC は、オランダから送る貴金属の量を増やしているにも関わらずアジア内で取引される貴金属の量は減少しているという状態にあったということであり、この事実は、18 世紀後半に VOC による貴金属のアジア間貿易が衰退していたということを示している。前章で示した通り、貴金属はインドでの綿織物獲得の際に大きな役割を果たしていたため、アジア間貿易を通じての貴金属の確保が困難になっていったことは、VOC の綿織物貿易不振を招いた大きな要因の一つになったと考えられる。さらに、図 3 と図 6 を比較すると、VOC の対ヨーロッパ綿織物輸出減少の時期がアジア内貴金属貿易の衰退の時期とほぼ重なっていることが分かる。このことも、VOC の綿織物貿易とアジア内での貴金属貿易が密接に関わっていたということを示している。そこで本章では、ヨーロッパとアジアの双方の視点から VOC のアジア内での貴金属貿易衰退の要因を考察していきたい。

(2) 本国側の要因

18 世紀のオランダ本国は、スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争、第四次英蘭戦争など、相次ぐ戦争に巻き込まれ、国家財政は疲弊していた。このような状況下で、オランダ国内の産業もまた停滞することになり、VOC の活動を支えていた造船業も急速に衰退していった。特に、17 世紀以来オランダの造船業の中心であったザーン地域における造船業の衰退は著しく、1730 年代に年間 100 隻ほどだったザーン地域の外洋船建造数が 1770 年代には年間 20 隻から 25 隻ほどにまで減少⁽³⁷⁾していた。さらに、イギリスやフランスなど他の国でも造船業が発達し、技術革新が起こったことで、オランダ製の船は性能の面で他の国に劣るようになっていった。このような状況に、VOC 自体の経営難も重なり、18 世紀後半には VOC の所有する造船所⁽³⁸⁾での船の建造数は次第に減少していくことになった。

こうしてオランダの造船業は急速に衰退していったが、これは VOC のアジアにおける活動にも影響を与えることになった。実際に、VOC がアジアに派遣した船の数は 1740 年ごろを頂⁽³⁹⁾点として、それ以降は減少傾向にある。そのためアジア間貿易のネットワークを維持するために必要であった軍勢力が低下することになった。また船の質でも EIC に太刀打ちできなくなっていた VOC は、1780 年に始まった第四次英蘭戦争で船の多くを拿捕され、利用できる船

(37) ド・フリース、ファン・デア・ワウデ、前掲書、278 頁。

(38) Bruijn, Gaastra and Schöffer (eds.), *op. cit.*, p. 52.

(39) *Ibid.*, p. 144.

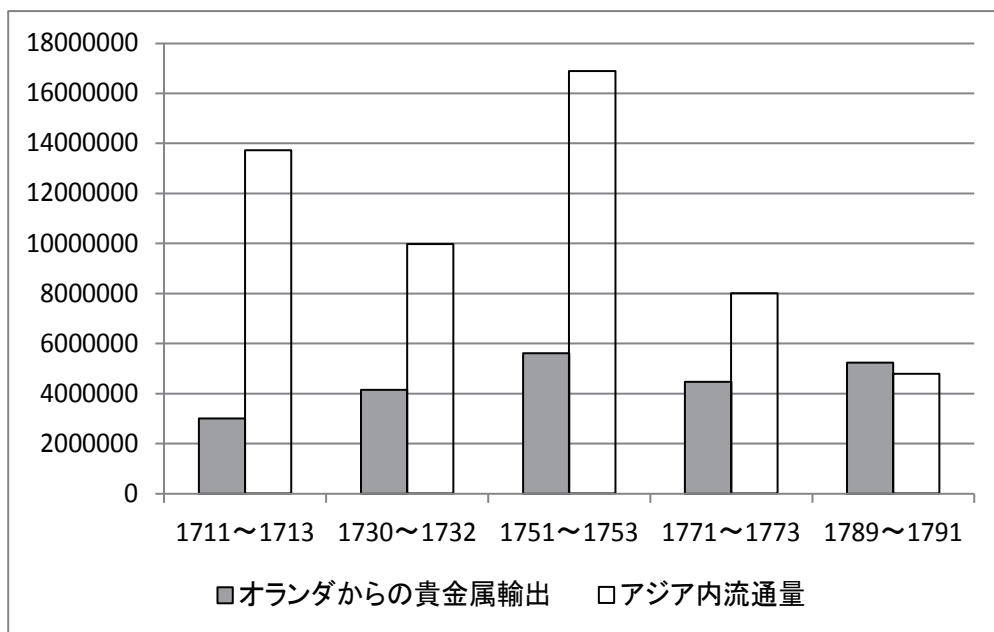


図6 VOCの対アジア貴金属輸出货量とアジア内流通量（単位：ギルダー）
 典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 354, Table 35. a. 及び p. 373, Table 47 より作成。

が半減するという結果を招いた。このことから、本国における造船業の衰退は、VOCのアジア間貿易を支えていた重要な要素の一つを失わせることにつながったということが分かる。

(3) アジアにおける銀価格の下落とその影響

次に、18世紀後半のアジアで起こった変化について考察していきたい。デニス・フリンによると、18世紀前半にアジア、特に中国へ銀が大量に流入したことで、ヨーロッパに比べ高い銀価格を維持していたアジアにおいて、銀価格の下落が起こった。1750年までに中国の銀価格は世界の他の地域並みになったと考えられている。⁽⁴⁰⁾ この変化は、VOCの貴金属貿易に打撃を与えることになった。⁽⁴¹⁾ 前章で論じた通り、VOCは中国で銀と金を交換するという貿易を行っていた。しかし銀価格の下落により、VOCがこの貿易で獲得できる金の量は急激に減少することになった。1751年から1753年の期間にVOCが広東で獲得した金の総額は、前述の通り、約42万ギルダーであった。しかし、約20年後の1771年から1773年の期間には、VOCが広東で獲得した金は皆無になっている。他方、この期間に中国に対するVOCの輸出が減少していたわけではなく、銀の輸出量はむしろ増加している。これは、中国で銀と金を交換するという貿易が利益を生むものではなくなっていたということを意味している。フリンによると、対中国貿易において銀に代わって利益率の高い商品となったのはアヘンであった。しか

(40) フリン、前掲書、54頁。

(41) 以下で行う分析も、前章の数量的分析と同様に、ヤコブスの提供するデータに基づいている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 305-373.

し、有力なアヘンの生産地であるインドのベンガル地方は、18世紀後半にはEICが勢力を拡大していた地域であり、VOCは思うようにアヘンを獲得することができなかった。そのため、VOCが中国で金を獲得するのはますます困難になっていった。

アジアにおける銀価格の下落は、相対的な金価格の上昇と、アジア内での貴金属貿易の利益率の低下につながった。そしてこの影響は、VOCにとって中国に次ぐ金の獲得地であったスマトラ島との貿易にも及んだ。1751年から1753年にかけて、VOCはスマトラ島のパダンの商館へ綿織物を始めとする合計18万ギルダーほどの商品を輸出し、引き換えに28万ギルダーほどの金を獲得していた。この時期のパダンからの輸出品の大部分はこの金が占めている。しかし、1771年から1773年の期間になると、パダンに対する輸出が約28万ギルダーと大幅に増加しているにもかかわらず、パダンで獲得できた金は約21万ギルダーほどに減少していた。この時期にもパダンからの輸出の大部分は金が占めていたため、パダンで他の商品を多く購入していたというわけではない。つまり、これは金の価格が大幅に上昇していたために起こったと考えられる。1789年から1791年の期間になっても状況は改善しておらず、約16万ギルダーの輸出に対し、獲得できた金は12万ギルダーほどに減少している。つまり、40年前とほぼ同じ金額の商品を輸出して、半分以上の金しか獲得できなくなっていたということである。

このように、アジア内で金価格が上昇し金を獲得するのが困難になるという状況に直面したVOCは、本国からの金輸出を増加させることで対応せざるを得なかった。1751年から1753年の間にVOCがアジアに輸出した金の総額は、約8万7000ギルダーであった。しかし、20年後の1771年から1773年の期間になると、その量は10倍近い86万ギルダーほどにまで増加している。⁽⁴²⁾つまり、VOCの持っていた、アジア間貿易を通じて金をアジア内で獲得できるという利点は、次第に失われていったということになる。

さらに、インド・東南アジア・日本を結ぶ「三角貿易」を通じて銀の量を増やすという貿易も、困難に直面していた。大きな要因はインドにおける銀と日本銅の価格の下落であった。インドでも中国と同様に銀の価値が下がっていたため、同じ量の銀で購入できる綿織物の量が減少していた。さらに、島田竜登によると、インドでの銅の販売価格と、それによって上げられる利益は1760年代を頂点にして、それ以降は下落傾向にあった。⁽⁴³⁾これらの要因により、「三角貿易」によって獲得できる銀の量が減少し、その結果インドで購入できる綿織物の量が減少し、アジアの他の地域に輸出できる綿織物の量が減少してさらにアジア間貿易の規模が縮小してしまうという悪循環に陥っていたのである。

(4) アジア人商人との関係の変化

また、VOCと現地のアジア人たちとの関係にも変化が生じていた。その一つの例が、ジャワにおける福建系華僑との関係の希薄化であった。VOCと福建系華僑が砂糖生産をめぐる

(42) *Ibid.*, p. 355.

(43) 島田「18世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易」、27-29頁。

協力関係を築いていたジャワでは、18世紀半ばごろから、VOCが砂糖の販売価格の下落を避けるために砂糖の生産調整を行うようになった。⁽⁴⁴⁾このように、VOCの側が労働力の増加を望まなくなっていたにも関わらず、砂糖生産の労働者であった華僑の流入は続いたため、失業者になる華僑が増加して治安が悪化するという問題が発生していた。そのためオランダ人の華僑に対する感情が悪化し、1740年にはオランダ人による華僑虐殺事件が起こって約1万人の華僑が虐殺された。この事件以降、VOCは支配地域への華僑の流入を制限するようになったため、福建系華僑のネットワークとの結びつきは弱まっていった。当時東南アジア各地に通商網を広げていた華僑との関係が希薄化したことで、VOCのジャワにおける独占的なネットワークは弱体化していくことになった。⁽⁴⁵⁾

VOCとアジア人商人との関係の変化は、バタヴィアにおけるジャンク貿易の衰退からも読み取ることができる。ジャンク貿易を行っていた華人商人たちは、18世紀のアジア間貿易において重要な役割を果たしていた。そのため、華人商人たちとの関係を強化しようとしたVOCは、自らの拠点であるバタヴィアにジャンク船の寄港を集中させようと試みた。この試みは成功し、1730年代までバタヴィアにおけるジャンク貿易は順調に発展していた。福建や広東の港を出たジャンク船は、東南アジアで需要の高かった絹織物や磁器をバタヴィアにもたらし、香辛料などの東南アジア商品を購入して持ち帰った。⁽⁴⁶⁾このように、VOCはバタヴィアでアジア間貿易における重要な取引相手であった華人商人たちと深い関係を形成することに成功していたのである。しかし、1730年以降に、バタヴィアにおけるジャンク貿易は急速に衰退していくことになる。⁽⁴⁷⁾この衰退は、ジャンク貿易そのものが衰退した結果ではなく、ジャンク船の寄港地がバタヴィア以外の他の港に拡散したために起こったものだった。この時期の東南アジアでは、VOCの支配領域の外にある港が急速に発展してきていた。ジャンク貿易を行っていた華人商人たちは、VOCによる課税や規制が厳しかったバタヴィアよりも、これらの規制のない港での取引を好んだ。そのためバタヴィア以外の港にジャンク船が寄港するようになると、バタヴィアでのジャンク貿易は衰退していくことになった。⁽⁴⁸⁾

これらの事例は、18世紀後半にVOCとアジア人商人たちとの協力関係が希薄化していったということを示唆している。前述の通り、VOCにとってアジア間貿易における主な取引相手であったアジア人商人たちとの関係は非常に重要であった。その関係が弱まったことで、VOCはアジア域内で自由に活動することができなくなっていったのである。その背景には、18世紀後半におけるアジア人商人たちの貿易活動の急速な拡大があった。近年の研究で、1760年から1840年にかけてアジア間貿易の規模の拡大があったということが明らかになっ

(44) Blussé, *op. cit.*, pp. 91-93.

(45) 籠谷、前掲論文、147頁。

(46) Blussé, *op. cit.*, pp. 115-127.

(47) 1730年代には年平均17.7隻のジャンク船がバタヴィアに來航していたが、1750年代には年平均9.1隻になり、1770年代には年平均5.1隻ほどにまで減少している。*Ibid.*, p. 123.

(48) 太田、前掲論文、150頁。

(49) た。この貿易拡大の担い手は、VOCではなく、イギリス人私貿易商人やアジア人商人たちで
(50) あった。18世紀後半のインドにおけるEICの勢力拡大に伴い、イギリス人私貿易商人による
貿易が拡大していき、それに刺激される形で中国沿岸や東南アジアでのアジア人商人による貿易活動も急速に拡大していった。結果的に、イギリス人私貿易商人やアジア人商人によるアジア内での貿易活動の拡大は、VOCのアジア間貿易におけるシェアの低下を招き、VOCのアジア間貿易ネットワークを浸食していくことになった。
(51)

(5)EIC の状況

ここまで述べてきたように、VOCのアジア間貿易は18世紀後半に衰退していき、アジア内で貴金属を効率よく獲得していくことは困難になっていった。これに対し、EICはほぼ同じ時期に、アジア内で容易に貴金属を獲得できるようになっていた。その原因となったのは、EICによるベンガル地方の植民地化であった。プラッシーの戦いに勝利したEICは、1765年にインドのベンガルとその周辺の州の徴税権を獲得して事実上の植民地とした。これはイギリスによるインド植民地化のきっかけとなったという点で大きな意義を有したが、同時に貿易決済方法にも大きな変化をもたらした。EICはベンガル地方の徴税権を獲得したことで、そこから上がる税収を手にすることができるようになった。この地域はインドの中でも特に人口が多い地域であり、税収は1年で約300万ポンドに達した。ベンガル地方は銀経済圏であったため、EICはこの莫大な税収を銀の形で得ることができた。そのためEICは、ここで得られた税収を綿織物やアヘンなどのインド産品の購入に充てることが可能になった。その結果、EICが本国からインドに輸出する貴金属の量は急速に減少し、1770年頃までには皆無になっている。
(52) つまり、VOCがアジア間貿易を通して獲得できる貴金属の量が減少していたのに対し、EICは容易にアジア内で貴金属を確保できるようになり、綿織物購入のために本国から貴金属を輸出する必要がなくなっていた。これにより、VOCがインド産綿織物の貿易に関して持っていた最大の利点は完全に失われることになった。

5 おわりに

本稿では、18世紀のVOCがなぜ綿織物を効率よく獲得することができたのかという問題と、それがなぜ衰退することになったのかという問題について検討してきた。VOCの綿織物貿易を支えていたのは、アジア間貿易を通じて貴金属を増加させるというシステムであり、それが

(49) Anthony Reid, 'A New Phase of Commercial Expansion in Southeast Asia, 1760-1840', in Anthony Reid (ed.), *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*, London, 1997.

(50) 杉原薫「19世紀前半のアジア交易圏——統計的考察——」籠谷・脇村編、前掲書、251頁。

(51) 事例として、18世紀後半に東南アジアにおいてインド産綿織物の需要が急激に増大し、輸入量が増加していたにもかかわらず、VOCによる対東南アジア綿織物輸出量は減少していたことなどが挙げられる。Reid, 'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth', pp. 35-42.

(52) 松井透『世界市場の形成』岩波書店、1991年、216-217頁。

衰退したのは、18 世紀後半のヨーロッパとアジアの双方で起こった変化によってそのシステムを通して得た利益が失われたからである。

VOC の貿易活動がアジア間貿易に支えられていたという事実は、VOC はヨーロッパに拠点を置く会社でありながら、アジア経済に深く依存していたということと、VOC が当時のアジアにおける貿易活動の「支配者」ではなく、「参加者」の一つにすぎなかったということを示唆している。VOC がアジア商人を排除してアジアにおける貿易活動を独占的に支配していたという解釈は事実に反しており、むしろ、VOC の側がアジア商人との協力関係に依存しているという状況にあった。そのため、18 世紀後半にアジアの経済状況に変化が起これば、VOC はそれに対応しきれず、その貿易活動を衰退させていくことになったのである。従来の解釈では、18 世紀末の VOC の衰退の要因については、会社内部の問題や、オランダ本国の国力の低下など、主にヨーロッパ側の要因が挙げられてきていた。⁽⁵³⁾しかし、18 世紀アジア経済史に関する新しい解釈に基づくと、VOC の衰退の要因を考察していく際には、それが立脚していたアジアの貿易構造そのものが変化した文脈でとらえる必要がある。

本稿で考察してきた VOC とアジア経済・アジア間貿易との関係から明らかなように、ヨーロッパ諸国によるアジアの植民地化の動きが強まっていた 18 世紀後半においても、ヨーロッパとアジアとの関係は、ヨーロッパ側が経済的に圧倒的に有利な立場に立ってアジア側に一方的に影響を与えるという関係ではなく、両者が相互に影響を与え合うという関係であり、むしろ、アジア側がヨーロッパ側に大きな影響を与えていたという側面さえあった。この事実は、冒頭で提示したように、「常にヨーロッパ側が主体となってアジア側に一方的な影響力を行使し、アジアなどの世界の他の地域を、ヨーロッパを中核とする世界システムに吸収していくことで近代の世界経済が形成されていった」とする従来の世界史像を根本的に見直し、「世界経済」の形成におけるヨーロッパとアジアとの相互の影響を重視した新しい解釈を提示していく必要があるということを示唆している。

(53) これらの要因に関しては、科野孝蔵『栄光から崩壊へ——オランダ東インド会社盛衰史——』同文館出版、1993 年などを参照。